

Japanese TV show admits faking science

日本のテレビ番組がデータのねつ造を認める

Nature Vol.445 (804-805) / 22 February 2007
David Cyranoski



納豆のダイエット効果をめぐってデータのねつ造を行った日本のテレビ番組が、非難を浴びた。

マスメディアに対し、自身の研究について話す機会のある研究者らにとって、日本で取り沙汰されている最近のテレビ番組のねつ造事件は教訓となりそうだ。関西テレビ放送は、番組の中で科学的実験データのねつ造があったこと、また、外国人研究者のコメント映像に実際の発言とは異なる内容の吹き替えを行っていたことを認めた。日本の他メディアからの非難を受けた同局は番組の打ち切りを決め、シリーズの過去520回すべての放送内容について現在、調査を行っている。

被害者の1人は、アメリカの大学で大豆の発酵について研究しているKim教授だ。ファーストネームや大学名を明かさない条件でNatureの取材に答えた。Kim教授が研究について関西テレビの取材を受けたのは2006年1月。だが今回、この2月に初めて番組の録画を見たKim教授は愕然としたという。教授のコメントが登場する回の放送では、味噌の健康効果が取り上げられた。「番組では、私のっていないことの多くがあたかも私の発言であるかのように作られていた。放送された私のコメントの約60%は、正確な内容ではない」と話す。

「発掘！あるある大事典II」は、週一度、10年間にわたりフジテレビ系列で放送されてきた人気の番組で、毎回の視聴率は15%ほど。研究者のインタビューを基に、科学ドキュメンタリー形式で食品や健康に関する話題を取り上げる趣向の番組だった。

ねつ造問題は、納豆を食べるとダイエット効果があるという1月7日の放送後にもち上がった。多くのメディアが疑惑を投げかけ、関西テレビは調査を開始。1月20日には、使用されたデータのほとんどでねつ造があったことを認めた。納豆でやせたとされる人物の写真は実験の被験者とは無関係のもので、減少したとされた中性脂肪値については、実際には測定さえ行われていなかった。

また、番組では、テンプル大学（米国、フィラデルフィア）の研究者Arthur Schwartzのコメント場面で実際とは異なる内容の吹き替えが行われていた。1月7日の放送では、大豆に含まれるイソフラボンが体内のデヒドロエピアンドロステロン（DHEA）値を上昇させる、とSchwartz教授がコメントしているかのようにみえる（DHEAは体内で自然に

分泌されるホルモンで、さまざまな健康効果があるとされている）。しかし、Schwartz教授の研究であるかのように紹介された実験は、実際には別の研究者のものであった。

Schwartz教授は、加齢に関連して起こる病気の進行を遅らせると考えられている、DHEAの効果について研究している。教授本人はNatureの取材に答えなかったが、大学の広報担当者は「(番組で放送された)コメントはSchwartz教授によるものではなく、研究内容も事実と異なる形で取り上げられている」と回答した。

その後、あるある大辞典で放送された過去の番組のいくつかについても疑惑がもち上がり、先述のKim教授のコメントにも不正な吹き替えがあったことがわかった。「番組を見ると、まるで私が、味噌にはダイエット効果があり、そのうえ、一定の神経的作用も認められるとコメントしているかのような」とKim教授はいう。しかし、実際に教授が説明していたのは、なぜ大豆は発酵させると消化しやすくなり、家畜の飼料としてよいか、という話だった。「私は半日がかりで研究所を案内し、研究の成果をみせま

した。私が何の研究をしているか、取材班も理解していました」。

科学データに関する不正は、番組の始まった当初にまでさかのぼる。例えば1998年、トリプトファンの睡眠作用を研究している千葉科学大学の長村洋一教授のところに、レタスを与えるとマウスが眠ってしまうか確かめる実験を実施したいとの依頼があった。長村教授と関西テレビの番組制作担当者らは、何匹かのマウスにレタスのエキスを与え、その後2時間にわたって経過を観察した。「そのときはテレビに出演したいとも思っていたし、実験がうまくいってネズミが眠るといいなと考えていた」と長村教授はいう。しかし、結局マウスに変化はみられず、制作担当者もそう理解して帰っていったという。

そのため、番組で自分の研究所のマウスが紹介され、「眠ってしまった!」というテロップが流れるのを見た教授は驚いた。番組ではその後、実践女子大学の栄養学研究者である田島真教授が、野生種のレタスには睡眠効果のあるラクチュコピクリンという化学物質が含まれており、栽培もののレタスにも少量含まれていると解説している。「番組の最後には、レタスの葉を3枚食べるとすっかり眠たくなってしまおうかのような印象が残った」と長村教授はいう。

田島教授は、自分自身でレタスを使った実験を行ったことはないが、提供したのは科学的文献から得た正しい情報だったと語る。他人の研究結果について話すことに「多少の違和感があった」ものの、それほど気にしなかったという。「我々はテレビタレントとして使われているのだ。だから指示通りにコメントする」と田島教授は話す。これまで500以上のテレビ番組に出演して栄養素について解説したという教授は、「もし私が出なければ、もっとひどい研究者を取材するだろう」と話す。

長村教授は、「あまりのばかばかしさ」に制作会社やテレビ局への抗議も行わなかったが、その代わりに、学会や一般向けの講演でこの番組に対する懸念について話してきた。「多くの研究者たちがあるある大事典には不信感をもってしたが、今まではこのような騒ぎにならなかった」。

日本の新聞の社説欄では、「インフォテイメント（娯楽情報番組）」の人气が急速に高まっていることや、契約で番組制作を請け負う制作会社が、特に健康や美容関連の番組で高視聴率を稼ぐのに躍起になっていることなど、日本のテレビ文化の現状に疑問を投げかけている。

一連のスキャンダルを受けて、あるある大事典の放送は1月で打ち切れ、関西テレビは外部有識者から構成される調査委員会にシリーズすべての調査を依頼した。調査報告書は3月中旬にも出される予定だ。2004年放送の「顔やせの科学」や、脳を活性化させる小豆の力を取り上げた2001年の放送回が注目を集めているといわれる。

総務省地上放送課の竹内友宏係長は、関西テレビは厳密に言えば「事実の曲解」を禁じる放送法に違反しており、2月末を最終期限としている関西テレビからの内部調査結果の報告を待って、対応を決めるとしている。しかし、総務省の手にある方策は、放送免許の取り消し、もしくは行政指導のみ。免許の取り消しに関しては厳しすぎるという考え方が一般的で、今まで実際に発動されたことがなく、行政指導についても数件の前例があるのみだ。しかし昨年、別のテレビ局が、煎った白いんげん豆のダイエット効果をうたう内容の番組を放送し、その後視聴者たちが食中毒を起こすという騒ぎがあった際には、このテレビ局に対して行政指導がなされた。

このようなでたらめの情報番組を増やさないため、2月初めに総務相は、放送免許の取り消しと行政指導の間に位置づけられるような新たな対応策を追加できるよう、今国会で求めていく姿勢を示した。

群馬大学の栄養学者、高橋久仁子教授は、同じような問題は日本全体に広がっていると話す。2000年以降、健康と栄養学を扱う娯楽番組を追い続けてきた高橋教授は、誇張表現や危険な間違いがみられることに気がついてきたという。「こうした番組はどれも疑ってみるべきだ」。しかし、提案されている法改正については、「何が正しく何が正しくないのかを



実際は眠りにつかなかったマウス。

政府に決められてしまう」として懸念を示す。「結局のところ我々視聴者は、業界の人々のモラル意識に頼るほかない」と高橋教授は話す。

1月26日、神経学者でもある日本学術会議の金澤一郎会長は、学術会議で定められた行動規範は、実験に携わるすべての者が守るべきもので、たとえその実験がテレビ番組向けのものであっても例外ではない、との声明文を発表した。ただし、金澤会長はテレビ局が規範に従うかどうかについては悲観的な見方をしている。「(テレビ局が) 目指しているのは科学的な正しさを伝えることではなく、いかに高視聴率を取るかだ。彼らには大きなプレッシャーがかかっている」。

あるある大事典のように極端な例はまれだとしても、科学的に完全に正確であるかどうかを無視してでも視聴者をあっといわせたいと考えるテレビ番組は、日本以外にも存在する。昨年、Brainiac: Science Abuseというイギリスの人気番組は、セシウムとルビジウムを使って浴槽いっぱいの水を吹き飛ばす内容の番組を放送したが、実際に使われたのは従来の爆薬だった。この番組を放送したテレビ局Sky Oneは、実験に際して科学者の協力は得たが、あくまで娯楽番組としての実験であることを重視したと説明している。「放送大学の授業を期待しているなら、チャンネルは別だ」。

Kim教授と長村教授は、メディアには注意するようになったという。Natureの取材を受けるにあたり、Kim教授は自分の発言がどのように引用されるのかを事前に確認することを条件とした。「これが今回、私が学んだ教訓だ」。